

序

東京教育大学・筑波大学

教授 永 岡 順

「学校経営研究」の発刊が第3巻を迎えることになった。創刊以来まだ日は浅いが、多くの同学の方々からの厚意ある激励や助言に支えられて、今回の刊行を見るに至ったことを感謝したいと思う。

本研究会の会長である吉本二郎教授が、本年3月をもって東京教育大学を停年退官されることになった。この第3巻は、それを記念して吉本先生のこれまでの学校経営に関する研究業績に関連あるものを取りあげることを中心に、特集号ともいえる内容のものとした。周知のように、先生は、戦後いち早く学校経営研究に取り組み、わが国の学校経営学が科学的見地から拡充されることの必要を提唱された。「学校経営学」(国土社)はその成果であるが、現代組織論の分析視角から、先生が学校経営問題の組織論的研究を推進されたことは高く評価される。その後わが国の学校経営研究は、多様な展開の過程をたどってきているが、先生の研究活動はその中にあって、独自の領域を維持してこられたといえよう。

今日、学校経営研究は、いまなお研究対象や方法論において未成熟であり、教育科学の重要な一分野として定着するために克服しなければならない多くの課題を内包している。学校経営研究はどのような課題を中心的にとりあげていくべきなのか、それはどのような研究方法をもって分析されるべきなのか、科学としての学校経営の発展のために検討されるべき問題が少なくない。これからの学校経営研究にとって必要なことは、これまでの研究の対象領域や方法論等の検討を経ながら、その成果を再吟味するとともに、今後の学校経営理論の再構成と拡充をいかに図っていくかということであろう。

東京教育大学は、明治以来継承してきた100有余年の歴史をこの3月で閉じる。けれども科学としての学問研究の歴史が、普遍的であって切れ目がないと同様に、われわれはこれまでの研究を受け継ぎ、継続的發展を遂げていけるよう努力を重ねていきたいと考えている。われわれは筑波大学において新しい研究の基盤を形成して、所期の成果の達成を意図しているが、そのためにも同学の方々のいっそうの御指導と御批判を賜りたいと思っている。

昭和53年3月

編 集 後 記

今、本研究会にとっても、そして本誌の歩みのうえでも、一つの大きな節を迎えようとしている。言うまでもなく、本年三月をもって、この研究会が生まれ育った東京教育大学の閉学を迎えるに至ったことである。そして、不思議な巡り合わせとしか言いようがないのだが、本研究会の名実ともに育ての親でもあり、中心者でもあった吉本二郎先生が、やはりこの三月に定年退官されることになった。

そのため、本誌第三巻をどのようなものにするかについては、多くの会員諸氏から意見をお寄せいただき、また合宿研究会や週例研究会でも何度となく検討していただいた。

さて、その出来ばえはと言えば、いささか自信がないというのが正直なところではあるが、それなりの意義をとどめ、特色を出しえたと思う。吉本先生には、ご自身のご研究の歩みを振り返っていただき、これまであまり伺うことのできなかった、先生のご研究を支えてきた問題意識や、目のつけどころを改めて説いていただいた。学校経営研究を志す方々や、吉本先生の研究業績に関心を持っておられる方々にとって、この論文は少なからぬ示唆を与えてくれるものと思う。

また、今後いっそう活躍が期待される比較的若手の会員から寄せられた六編の論文は、各論者の問題関心から吉本先生の業績に検討を加えている。必ずしも、十分こなれた論展開がなされていない面もあるが、今後の本研究会の研究水準向上への一つのステップとしてご覧いただければ幸いである。さらに、永岡順先生には第一巻で展開していただいた学校経営計画論のいっそう充実した続編をご執筆いただいた。また、名誉会員である伊津野朋弘先生には、本号のためにご多忙のなか貴重な論文をお寄せいただき、感謝している。

自由研究の部門では、とくに現場で活躍しておられる先生方から、日頃の実践のなかで培われてきた問題意識に支えられた、学校経営のリアリティが脈うっている論文をお寄せいただき、掲載できたことを喜びとしたい。

なお、昨年十月小島弘道氏を研究室のスタッフに迎え、週例研究会もいっそう活況を呈している。本研究会の中心拠点が、本年四月より筑波大学に移ることになっているが、これまでより以上に活発な研究活動が展開されるものと思う。

ともあれ、本号が、本研究会および本誌の今後の発展充実をうらなう重要な位置にあるだけに、編集上の課題をも含めて、多くの先学、同学諸氏からの前二号にもまして、厳しいご批判・ご叱正を賜わるよう、切に願う次第である。

(西 記)